

献 辞

『ヨーロッパ文化研究』もこれで第13集となるが、本号は、ことしの春、定年で本学を去られる濱川祥枝先生に、御退任の記念としてお捧げすることとなった。

濱川先生は、わが国の独文学界において知らぬ者なきドイツ語学研究の大家である。すでに、先生が東京大学文学部から成城大学文芸学部へ移られた一九八四年まで、十七年間にわたり、学科こそ違え先生と同じ教授会に席を連ねさせていただいた私であってみれば、かねがね畏敬してやまなかったこの大先輩を、またここで送りすることは、まさに感慨無量以外の何ものでもない。先生は、これまた著名なドイツ文学者の登張正實先生が一九八七年に本学を定年退職されてからは、フランス文学の山田壽先生と並んで、まさにわれわれの学科の重鎮として人望を集め、教務委員を二期、大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻主任を一期つとめられたのをはじめ、公務に尽力されること多大であった。

他方、登張先生の御退職を記念する『ヨーロッパ文化研究』第6集いらい、本号にいたるまで、一九九一年の第10集を除き、七回にわたって濱川先生は、バイエルンの閨秀作家レーナ・クリストに関する長大にして精緻きまる論文を連載してこられた。学究的良心の固まりのような先生は、「まだまだバイエルン方言についての理解が不十分で」などと謙遜なさりながら、実に五回もドイツへ赴き、レーナの生涯の曲折を現地に踏み込んで詳細に調べ上げておられる。この論文は、単にレーナという人物がわが国の学界でこれまで顧みられてこなかったという理由からだけでなく、その模範的な研究方法においても、不朽の価値をもつ

ものといえよう。

研究者としてまことに厳しく、たゆまぬ努力を続けておられる先生も、教育者としては学生たちを心から愛し、時には寛大でさえあったことを私は知っている。そして、学部においても学科においても、常に濃厚で、どちらかといえば寡黙だったが、議論の要所所で発せられる言葉は、簡潔にして本質をつく鋭いものであった。しかも、豊かな人間味に溢れた先生は、美酒を愛で味を見分ける相当なグルメであったし、「僕はそのうち男と女という題のエッセイを書いてみようと思ってるんです」などと、笑いながらおっしゃったこともある。

このような敬愛すべき濱川先生が、定年ゆえ止むを得ざることとはいえ、早くもわれわれの学科から去って行かれるとは、一同まったく淋しさに堪えない。しかし今は、今後の先生がますます御壮健で熟年の日々を愉しみ、心ゆくまで好きなお仕事を進められんことをお祈りし、同時に、残されたわれわれが先生に見守られつつヨーロッパ文化学科をさらに充実させるよう努めることを誓い合うべきであろう。

どうか濱川先生、この論文集を快くお受け下さり、将来ともわれわれの研究と教育とによき御助言を給わらんことを。

平成六年一月

成瀬 治

本号が、この三月をもって定年退職される濱川祥枝先生に捧げられた記念論文集であることは、すでに「献辞」に述べたとおりで、つけ加えるまでもない。けれども、われわれヨーロッパ文化学科の教員一同は、いまひとつの思いを本誌に籠めた。それは、昨年の六月下旬、意外にも早く他界された山田壽先生に対する、深い追悼の念である。濱川先生は、ご自分の退職記念ではなく、山田先生の追悼号にしてはどうかと提案されたことであつた。本号にフランス文学の先生方が多く原稿を寄せておられるのは、そのためでもある。なお、同じく力作を寄せて下さった逸身喜一郎先生は、まだ定年までほど遠いが、やはりこの三月一杯で退任し、他大学へ転出なさることを一言しておく。

(成瀬記)

平成6年3月25日印刷

平成6年3月31日発行

発行者 上 原 和

発行所 成城大学大学院文学研究科

東京都世田谷区成城6-1-20

(電)3482-1181 (郵)157

製作 財団法人 角川文化振興財団

東京都文京区本郷5-24-5 角川本郷ビル6F

(電)3817-8581 (郵)113

ヨーロッパ文化研究 第13集